

高所プロジェクトの概要

奥宮清人
総合地球環境学研究所

(プロジェクト名)

人の生老病死と高所環境—3大「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応

(プロジェクトリーダー：奥宮 清人)

キーワード：高地文明、生老病死、高所環境、生態・文化的適応、ヒマラヤ、チベット、アンデス、エチオピア、グローバリゼーション

1. 研究目的と内容

(1) 研究目的

・研究の目的と背景

地球上に古くから文明が興ったところとして、平地の大河の流域がよく知られており、大河文明と呼ばれる。我々はFS研究で、アンデス、ヒマラヤ・チベットとエチオピアの3大高地を比較することにより、「高地文明」という視角の重要性に気づいた。「高地文明」は、このプロジェクトの提唱する仮説であり、人が高所環境へ適応していったローカル・ノーレッジ「Local Knowledge」とその限界の実態を検証しながら、人間と環境のあいだの関係を理解し、総合地球環境学の上に新たな視点を切り拓くことが本研究の目的である。(図1)

「高地」は長年にわたり、「高地文明」とよんでもよいような人間生活圏を構成しており、環境利用の方法や環境観・世界観の内容など、人間-環境関係を内包する文化体系全般に共通した性格とともに地域の固有性を備えている。たとえば、アンデスではジャガイモとリャマ、アルパカ、チベットでは大麦とヤク、エチオピアではテフ、エンセテというように、いずれも高地に適した作物や家畜が選択的に栽培化や馴化され品種改良を遂げている。また、移動牧畜や役畜を用いた交易により、一定の広域性を持つ伝統的地域流通システムが形成・維持され、中心都市も存在していた。さらに、いずれにおいても平地とは異なる独特の精神性の高い宗教が発達した。これまで、高所における個別の研究領域、あるいは個別の地域に関する研究

はみられるものの、3大高地文明を横断的かつ時間軸において縦断的に比較検討し、しかも学際的にその共通性と多様性をとらえようとした総合地球環境研究はない。

山岳地帯は、地球上の5分の1の面積を占め、世界人口の10分の1が暮らしている。その中でも、3大高地文明は、標高約2500メートル以上という平地の3/4以下の低酸素環境に多くの先住民が生活してきた経緯とともに、緯度の低い熱帯高地という共通点がある。高所住民は生理的には低酸素というきびしい環境に、酸素飽和能の変化や多血症などにより適応してきた。未適応あるいは逆に過適応が想定される慢性高山病といった非適応状態も存在する。また、高所環境においては、“人の老化自体が促進”されている可能性があり、人の生老病死のありようをみる意義は大きい。一方、高所は、その冷涼性ゆえに病原節足動物を介するマラリアをはじめとする熱帯病から免れており、さらには、地理的隔離性や人口密度が希薄な点で、人から人へ伝染する疫病からも免れているという共通の利点も認められる。しかしそれぞれの高地には地域差がみられ、生物学的、進化的には、高所への適応戦略にも多様性がみられるが、これまで地球環境の視点からの比較研究はない。さらに、「ひとはそもそもどうして高所に住むようになったのか」という根源的な疑問にもまだ解答が得られていない。

高地は、人類が獲得し得た人間-環境関係体系のモデルとして貴重である。一方、経済・社会のグローバル化に伴う都市化、環境破壊が地球的規

模で進む今日、相対的に近代化の速度の小さかった高地民の生活と高所環境も、都市への人口流出にともなう村落共同体の破綻、大規模な森林・草地破壊など、伝統的にはありえなかった急激な変化に見舞われている。寿命の延伸やライフスタイルの変容とともに、高血圧や糖尿病などの近代の文明病ともいえる、生活習慣病が激増している。高地は、グローバリゼーションの浸透に特に脆弱である可能性もあり、実態の解明は焦眉の問題とも言える。

・プロジェクトの最終成果として何を示そうとするのか（図1）

本プロジェクトは、人間と環境の相互関係を、地球規模で高地文明という視角をとおしてながめ、さらに、ひとを中心にすえ、その生老病死の実態を解明する医学を基本軸としつつ、3大高地文明を支えた環境そのものと、その環境と人との関わりを体系として把握・評価できるメンバーを揃えた、学際的な文明研究組織であり、高所環境に特有の類似性や特質と、問題点を明らかにする。グローバリゼーションに対する影響を評価し、高地文明の未来可能性を提言する。さらに、低地を中心に顕在化している近代文明の破綻ともいえる地球環境問題の解決へ向けて、高所からこそ示すことのできるモデルや知恵を提示することが期待できる。

(2) 本プロジェクトの学問的アプローチの特徴

1) フィールド医学にもとづく地域研究

ヒマラヤ、アンデス、エチオピア高地の住民を対象に、フィールド医学的手法を用いて、それぞれの高所に特有の疾病、老化のありようを明らかにし、あわせて健康の背景となる生態、生業、文化との関連をさぐる。

2) 文理融合の学際的な高所環境研究

本プロジェクトは、医学、生態学、農学、人類学、気象学、宗教学等のそれぞれのアプローチを統合して、高所民族と環境の問題を、主として人の視点から考察する。

3) 高所地域間比較研究

上記のアプローチを、ヒマラヤ、アンデス、エチオピア高地に適用し、高所に共通した環境問題

と、それぞれの地域固有の環境課題とそれに対するローカル・ノーレッジ「Local Knowledge」を共有智とすることによって、地域間比較研究を行う。

4) 高所と低所のインタラクション

高所の隔離性ととも非隔離性を重視して、高地を考えるにも低地とのインタラクションを不可欠の視点とし、隣接する中所文明・低所文明にも高所と同等かそれ以上の注意を払った研究を行う。

5) 時間軸の変化に対する考察

ネパールやチベットのエコツーリズムに象徴されるように、高所がグローバリゼーションの受け皿であるだけでなく、その地域的なうねりがいまやグローバリゼーションの能動的な主体ともなってきたのは、ここ数十年の変化と考えられる。本プロジェクトを担当する研究者は、それぞれのDisciplineを通じて、これら高所に関する過去数十年の研究蓄積をもっている。高所環境の、近年の急速な変化についても考察をくわえる。

(3) 研究体制と研究の内容・方法

・班・グループの構成と役割

人の生老病死と高所環境の関係を主に解明するフィールド医学班と、高地における生態・文化的適応を高地文明の視角から解明する山岳人類学班を2本の柱とし、両班研究がそれぞれ関連を有する分野の各班（高所・低所インタラクション班、農業生態・環境変遷班、森林生態班、自然学班）より構成される。

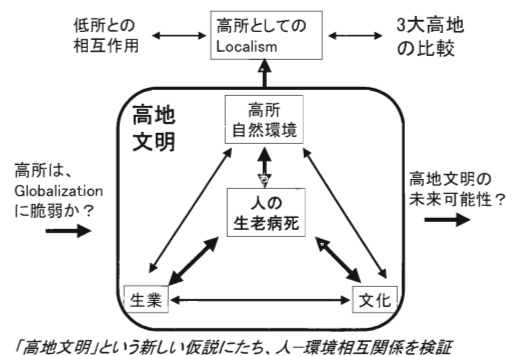


図1 本プロジェクトの取り組み

・対象地域

- 1) ヒマラヤ・チベット
- 2) アンデス
- 3) アフリカ高地

・研究内容・方法

- 1) フィールド医学班：高所住民の生老病死と自然、生態、文化との関連

高所特有の疾病は、人の身体に刻み込まれた環境問題ともとらえることができる。高所住民は、低酸素環境という人体にとって過酷な生活条件を課されており、その生存のためには、生理的な低酸素適応が必須であるが、それにもなう疾病も存在する（慢性高山病）。一方、高所は、マラリアに代表される動物媒介感染症を回避できるという利点があり、また粗な人口密度のため、人から人へ伝染蔓延する疫病の発生からもまぬがれている。しかし、今や高所にもおよんでいる近代化と生業の変化、医療技術の進歩にもなう寿命の延長は、同時に、高所民族にも文明病ともいえる生活習慣病をもたらしているが、生活習慣病と低酸素適応との関係については明らかでない。医学班は、身体に刻み込まれた環境という観点から、高所住民の疾病と老化の変容をさぐり、あわせてその背景となる生態系と社会の変化との関連を考察する。

- 2) 山岳人類学班：高地民族の環境利用に関する山岳人類学的研究

アンデス、ヒマラヤ、チベット、そしてアフリカなどの高地に共通する特色の一つは、多数の先住民が暮らしていることである。そして、その暮らしには農業や牧畜などの環境利用の方法においても共通性が見られる。熱帯、亜熱帯に位置し気候が比較的温暖な熱帯高地であり、地形的には、広大で平坦な高原の存在。高地に適した家畜（リヤマ、アルパカ、ヤク）や作物（ジャガイモ、大麦、ソバ、テフ、エンセーテ）の存在、さらにこれらの家畜の飼育や栽培をもとにした暮らしが確立しており、高地宗教も存在する。おそらく、このような共通性が遠く離れた高地でありながら、上記の地域で高地文明と呼べる高度な文明の誕生を可能にしたのであろう。このような見通しをもちながら、本研究班では、高地という環境と人間のあ

いだの関係を主として生業を通して明らかにし、ひいては地球環境問題に対しても提言できるような、あるべき環境利用の方法を探ることを目的とする。

- 3) 高所・低所インタラクション班：チベット最高所の遊牧集落—畜群と社会、生活様式の維持機構

チベット高原における最高所の遊牧民集落は標高4500mを超える。そこには、一生にわたってこの集落よりも低い土地に降りることのない構成員さえある。移動牧畜のかたちをとる遊牧こそが彼らの主な生活様式だが、こうした高度限界地帯での畜群およびヒト社会が抱える特有の問題や、畜群・ヒト社会双方の維持・再生産機構は、ほとんど調べられていない。ただし、こうした集落と生活様式は、自給自足的に孤立しえているのではなく、低所との複雑なインタラクション（Highland-Lowland Interaction）にかなり依存することによってはじめて、何百年にもわたって存立しえていることがわかっている。この点を、種畜や食料・畜産品売買のための交易、妊娠・出産・通婚などの人口学的側面の調査から明らかにする。なお、草地資源の劣化の有無など、生活圏内に存在する天然資源の評価と、いわゆる「チベット解放」後の牧畜・畜産振興施策の評価についてもあわせて行う。

- 4) 農業生態・環境変遷班：高所における農耕地の環境変遷と農業生態系からみた地域体系

チベット高地では遊牧と同等、あるいはそれ以上に、麦栽培が基幹となっている。高所での遊牧と低所での麦作が有機的に一つの系をつくり、チベット文明を農業生産から支えてきた。気象学的なメソ空間として農業生態系的には、高所と低所は、一つの系の中に埋め込まれたSub-Systems—地域体系として、歴史的空間として機能してきたのである。

チベット、エチオピア、アンデスという3大高所を対象としたこのプロジェクトにおいて、自然環境に適応してきた人々の在地の知恵、在地の技術を、開拓時代の古環境同定により農耕地の自然環境の変化を明らかにし、高地文明をささえてきた地域体系を農業生態系、自然環境と人間活動

の変遷という視点から、考察していきたい。ヒマラヤにおいては、プラマプトラ地域体系として研究を進行中であり、エチオピアやアンデスでも、規模を小さくして、調査村を高所と低所に設定して、点、線、面から、このテーマを追ってみたい。方法論は、(1) 調査村における農耕地を中心とする生態資源利用を重視した世帯調査。(2) Ecosystem レベル（多くは郡レベルに相当する）における開拓時代の古環境の復元と自然環境の変遷。(3) Ecosystem レベルでの自然環境と土地利用と農村市場、病気に関する農業生態的調査。(4) メソとしての高所と低所の具体的なつながり。以上の観点から、技術伝播、物流、生態資源利用、病気の伝播、古環境の変遷、人と民族の移動などを比較しながら考察し、地域体系を具体的に描きながら、農村環境問題を人々の高地環境への適応の問題として明らかにしていきたい。

5) 農業経済班：高所の経済的サステナビリティの評価とグローバリズムの影響—アジアの農業より

国や地域の生活のあり方・質は、どのような森林、水源、農業を維持し、つくりあげていくのかという農業観や自然観に大きく影響される。高所固有の生業形態（チベットでは、ヤク-灌漑オムギ-交易）は、森林、草地、水源等の資源に規定された、ある一定の生業自給（サステナビリティ）圏を形成していると考えられる。この生業自給圏における一次産業生産と人口、地域資源（森林、草地、水源等）の関連を明らかにする。これに基づいて、生業自給（サステナビリティ）率という指標はどう考えるべきか、論点を整理する。

次いで、生業自給圏の解消の動向、時期、その要因を、主に農家経営（所得や家計支出）資料を利用してまとめる。日本では、1960年代高度経済成長期には、非農業部門との所得格差解消のために農業は、選択的拡大という名目で、自給的・複合経営から、果実、畜産等へのモノカルチュア化を進めた。コメから麦への主食の変化、野菜・魚中心の食生活から、肉類・油脂、糖類中心の食事への移行が急速に進んだ。こうした日本の経験との比較を通して、高所においては、生業自給（サステナビリティ）率を向上させる復元力が働く条件があるか、考察する。

6) 森林生態班：森林利用からみた高所環境問題

人間を含む動物の場合に低酸素が問題となるのに対して、高所における植物分布を強く規定するのは温度要因であり、たとえば森林限界は温量指数15度Cに沿っている。その森林限界を構成する樹木は、熱帯では常緑広葉樹、温帯では常緑針葉樹である。熱帯から温帯まで湿潤気候が連続する東南アジア大陸部からアッサムにかけては、ヒマラヤ付近が移行帯となって、低緯度側に熱帯型垂直植生分布が、高緯度側に温帯型垂直植生分布が重なるように入り込んでいる。森林班は、植生の垂直分布を環境傾度の目安として、高所住民の生活・生産活動と土地・森林利用の変容を現地調査とGIS/RSにより明らかにし、脆弱な上部山地林と森林限界域が抱える環境問題を考察する。

7) 自然学班：高地における自然観の比較研究

「自然学」は、「自然を理解しようとする学問であり、自然観の学問である」（今西錦司）とともに、「自然を客観的に扱うことでなく、自然にたいして自己のうちに、自然の見方を確立することでなければならない」（同）。この研究プロジェクトが対象とする高地の人々はそれぞれ、自然に対するさまざまな知識をもち、それが生活の知恵となり、日々の暮らしのバックボーンになっているはずである。価値観や宗教観もふくめた、そうした自然にたいする認識、つまり自然観について考察する。

(4) 地球環境問題における、このプロジェクトの位置づけ

・「地球環境問題」の認識

地球環境問題は、自然と人の相互作用の破綻した結果であり、人間の文化の問題としてとらえられる。本プロジェクトでは、地球環境問題にたいし、高地という新たな枠組みを設定してとりくむ。すなわち、近代文明の主軸である大河文明とは異なる、地球上の高地に長年持続的に築かれてきた「高地文明」という新たな仮説を設定した。高地文明は、人類が獲得し得た人間-環境関係体系のモデルとして認識し、その相互作用環を解明する。さらに、経済・社会のグローバル化等による現在の急激な変化の影響を適切に評価するとともに、高地文明と地球環境問題の関係を解明していく。

個々の問題としてある、大規模な森林・草地破壊、都市人口流出による村落共同体の破綻による土地利用維持の困難、高所環境独特の疾病や文明病の浸透などの、各問題を切り取るのではなく、高地文明の視角から、どう組み上げられているのかを総合的に評価するというアプローチを行う。総合的な取り組みによってこそ、地球環境問題の解決に資する新たな価値観が生み出されるという認識である。

・対象地域と「地球環境問題」の関係

高所民族は、きびしく、ぜい弱な環境を最大限利用してきたととらえられる反面、文明の持続に、都合の良い環境であったという見方もできる。

高所はその独特な生態系と生業ゆえに、固有のローカル・ノーレッジ「Local Knowledge」に基づいた巧妙な自然と人の相互連環が築かれてきた。しかし、グローバリゼーションによる変化の加速に対して、高所環境は脆弱である可能性もある。本プロジェクト推進者たちは、高所が環境的グローバリズムと高所のローカリズムが共生する“Glocalization”が端的にみえる地域ではないかという仮説を議論しており、高地文明の未来可能性を提言したい。これまでに、高所での個々の研究はあるが、3大高地を比較するという総合的な地球環境研究は少ない。

・プロジェクトの成果がどのように「地球環境問題」の解決に資するのか

本プロジェクトは、高地文明という新しい枠組みと視点を設定し、高地民の生老病死の実態を解明する医学を基本軸としつつ、3大高地文明を支えた環境そのものと、その環境と人との関わりを体系として把握・評価することにより、高所の文明に特有の類似性や特質と、問題点を明らかにする。さらに、低地を中心に顕在化している近代文明の破綻ともいえる地球環境問題の解決へ向けて、高所であるからこそ示すことのできるモデルや知恵を提示することが期待できる。

(5) これまでの活動成果

・研究体制の構築

本プロジェクトは、医学、生態学、農学、人類学、経済学、気象学等のそれぞれのアプローチを統合

して、高所民族と環境の問題を、主として人の視点から考察する。環境と人との関わりを体系として把握・評価できるメンバーを揃えた、学際的な文明研究組織である。3大高地文明を評価できる、総合的、学際的な研究歴のあるメンバーを構築した。

・方法論の検討成果

高所環境をどうとらえるか、低所に対する還元は何かという議論を行った。1、「3大高地文明」という捉え方、2、標高では人に低酸素の生理的影響の出る約2500m以上を目安にするが、文明と標高との関係も今後の検討課題にする、3、高所を中心に、低所とのインタラクション、4、高地とその周辺を地域体系としてみるアプローチも必要である、ことを議論した。

・予備調査等の成果

1) エチオピア高地調査

広大な高原の天水による土地利用、熱帯高地ならではの気候、高地に適応した栽培原産作物（テフ、エンセーテ）、高地と低地を分つマラリアの問題、エチオピア正教における高度の精神性、貧困と共同扶助精神が重要であることが認識された。環境問題として森林減少の深刻性、貧困とエイズ、貧困層への糖尿病の増加の問題を認識した。

2) 中国、雲南よりチベット高原調査

高度変化を利用した土地利用、高地に適応した農耕（チンコー大麦）と牧畜（ヤク）、高日照性を利用した工夫、チベット仏教の深い精神性などを確認した。一方、青蔵鉄路の開通による大量の物資と人の流通、電気、携帯電話、バイク、高血圧、肥満などのグローバリズムの浸透も認めた。

3) 長年のアンデス・ヒマラヤの山岳人類学的比較調査と、FS調査をふまえて高地文明への展望を紹介した「雲の上で暮らす、アンデス・ヒマラヤの高地民族の世界」（山本紀夫著）を出版し、これらの業績に対して平成18年度の秩父宮記念山岳賞受賞が授与された。

(6) 研究遂行上の問題点と解決方法

・IS・FSの結果明らかになった問題点と解決方法

全体的には、調査フィールドが広いと、問題

の共有をメンバーで議論するため、打ち合わせや研究会を頻繁に行うこと、フィールドへの共同調査の充実を図ることが必要である。そのためには、相応の予算と時間を必要とする。地球研の本プロジェクトとして始動することによって、本プロジェクトに専念する数名の研究員をあらたに措置し、有機的な共同研究が可能となる。

2. 今後の活動

(1) 年次進行表（図2）

フィールド医学班は、すべての3大高地全域の高所住民の評価を行い、横断的かつ、年次を追って縦断的に、フォローアップする。山岳人類学班は、アンデスを中心に調査を続けながら、エチオピア高地に対象を広げ、3大高地の文明比較を進める。高所・低所インタラクション班、農業生態・環境変遷班、森林生態班は、ヒマラヤ・チベットを主体に調査を続ける。自然学班は、3大高地の自然観の比較を順次行う。一年目は、各班のフィールド組織と体制の強化を行い、2年目より、各班が合同して、ひとつの高地文明の共同調査を行う。2008年は、アンデスの共同調査を、2009年は、ヒマラヤ・チベットの共同調査を、2010年は、エチオピア高地の共同調査を進める。5年目は、3大高地文明の相互比較を行い、6年目には、

総合的なまとめを行う。

3. プロジェクトメンバー（2006年12月時点）

(1) プロジェクトリーダー：奥宮清人

(2) フィールド医学班

コアリーダー：奥宮清人（フィールド医学、老年医学・総合地球環境学研究所助教授）総括
病気と文明 高所適応と疾患

コアメンバー：松林公蔵（フィールド医学、老年医学・京都大学東南アジア研究所教授）高所住民健康 加齢と文化

メンバー：石根昌幸（老年病学・京都大学フィールド医学博士課程）生活習慣病

大塚邦明（循環器内科、時間医学・東京女子医大教授）循環器疾患 動脈硬化と低酸素

和田泰三（老年病学、疫学・京都大学フィールド医学・助手より英国留学中）病気の頻度と環境

尹紹亭（人類学・雲南大学人類学博物館教授）生業と文化

(3) 山岳人類学班

コアリーダー：山本紀夫（山岳人類学・国立民族学博物館、教授）総括 農耕文化 高地文

	2007 (PR)	2008 (FR1)	2009 (FR2)	2010 (FR3)	2011 (FR4)	2012 (FR5)
1) フィールド医学班		フィールド	調査 (3大高地全域)			まとめ
2) 山岳人類学班		フィールド	調査 (アンデス、エチオピア主体、3大高地比較)			まとめ
3) 高所・低所インタラクション班		フィールド	調査 (ヒマラヤ・チベット主体)			まとめ
4) 農業生態・環境変遷班		フィールド	調査 (ヒマラヤ・チベット主体)			まとめ
5) 森林生態班		フィールド	調査 (ヒマラヤ・チベット主体)			まとめ
6) 自然学班		フィールド	調査 (3大高地全域)			まとめ
各班の主体フィールド組織の強化	←→					
1)～6) 班の共同フィールド調査	準備	アンデス	ヒマラヤ・チベット	エチオピア高地	相互比較	まとめ
国際ワークショップ					←→	
全体のまとめ					←→	

図2 年次進行表

明論

メンバー：稲村哲也（文化人類学・愛知県立大学教授）牧畜論 環境利用
 本江昭夫（草地理学・帯広畜産大学教授）家畜飼育
 重田眞義（民族植物学・京都大学助教授）植物利用・農耕文化
 大山修一（自然地理学・首都大学東京助手）環境変動にともなう生業構造の変化
 千代勇一（文化人類学・在コロンビア日本大使館専門調査員）環境利用
 藤倉雄司（草地理学・帯広畜産大ボス・ドク）草地利用

(4) 高所・低所インタラクション班

コアリーダー：月原敏博（人文地理学、地域研究・福井大学教育地域科学部助教授）高所と低所の流通 超高所牧畜

(5) 農業生態・環境変遷、農業経済班

コアリーダー：安藤和雄（在地農業・京都大学東南アジア研究所助教授）総括 在地農業 農村開発

コアメンバー：河合明宣（農業経済学・放送大学助教授）農村開発と経済

メンバー：宇佐見晃一（農業経営学・山口大学農学部教授）農村生業経済 アジア農村市場
 水野一晴（自然地理学・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授）高地環境植生変遷

大西信弘（水資源生態学・京都学園大学バイオ環境学部助教授）アジア環境保全 観光資源
 宮本真二（環境歴史学・琵琶湖博物館研究部・環境史研究領域研究員）古環境

小坂康之（民族植物学・京都大学東南アジア研究所非常勤研究員）民族植物

羅二虎（考古学・上海大学大学院教授）古代生業

(6) 森林生態班

コアリーダー：竹田晋也（森林資源学・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授）総括 森林生態と資源利用

メンバー：加藤真（生態学・京都大学大学院人

間・環境学研究科教授）植物多様性と進化
 鈴木玲治（土壌学・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助手）土壌と森林
 生方史数（資源経済学・京都大学東南アジア研究所研究員）資源利用と経済
 小坂康之（民族植物学・京都大学東南アジア研究所非常勤研究員）民族植物
 山口哲由（畜産学・京都大学地域研究統合情報センター JSPS 特別研究員）移牧と環境利用
 山田勇（森林生態学・元京都大学東南アジア研究所名誉教授）アドバイザー、森林とエコツーリズム

(7) 自然学班

コアリーダー：斎藤清明（自然学・総合地球環境学研究所教授）高所民の自然観

(8) 高所環境評価班

谷田貝亜紀代（気象、気候学・総合地球環境学研究所助手）高地気候変遷

白岩孝行（自然地理学、雪氷学・総合地球環境学研究所助教授）高所環境評価 雪氷

4. 地球研のプロジェクトに向けて

総合地球環境学研究所（地球研）は、地球環境問題の解決に向けた学問の構築のための総合的な研究をおこなうべく、2001年（平成13年）4月、文部科学省の大学共同利用機関として創設された。2004年4月からは、大学共同利用機関法人、人間文化研究機構を構成する研究所となった。地球環境問題は、いわば、人間と自然との相互作用の帰結だととらえ、根本的には人間の生き方、ことばの最も広い意味で人間の文化の問題といえる。地球環境問題の解決に資するために、新しい取り組みが行われている。

地球研では既存の学問分野・領域で研究活動を区分せず、「研究プロジェクト方式」で総合的な研究を展開している。研究プロジェクトは、「インキュベーション研究」によって企画・公募され、1年程度の「予備研究」の対象になる。予備研究は、研究プロジェクト評価委員会によって適当と認められれば、運営会議で承認されて「本研究」へと進み、1年のプレリサーチ（移行準備期間）を経て、5年程度の研究が行われる。

本プロジェクトは、下記の理由から、地球研で行うことがふさわしいプロジェクトであると考えている。

1) 本研究は、高所環境という、アジア、アフリカ、アメリカ大陸に共通するテーマを、それぞれの地域に通暁した研究者たちが「地球環境」という同一の視点から実施する横断的かつ時間軸にも縦断的に実施する学際研究であり、従来の科研ベースの単一地域研究ではなしえないものである。

2) 高地文明という新しい仮説にたち、人-環境相互関係を検証する文理融合の環境学研究であり、地球研のプロジェクトにこそふさわしい。地球規模のフィールドを専門とする学際的なメンバーが結集しておこなう本研究は、組織横断的なものであり、既存の研究所や大学講座をこえたプロジェクト方式をとる地球研でこそ可能である。

本プロジェクトは、2006年12月時点で、「予備研究」の段階であり、2-3月の評価委員会と運営会議で承認されれば、「本研究」に進むことができる。その実現の可能性にむけて、問題点をさらに議論しながら、より良きものにすべく、多くの方のご意見やご批判をいただきたいと考えている。